

相手のことをもっと知ろう

民間外交推進協会

専務理事 湯下博之さん

海外ばかりでなく国内でも外国の人々と接する機会が多くなっている。

彼らと付き合う上で大切なことは？

外務省 OB で、現在も民間外交に取り組んでいる湯下博之さんに聞いた。

対ベトナム円借款再開に尽力

—— 欧米、アジア8カ国での勤務を経験し、ベトナムとフィリピンへは大使としての赴任でした。



最初は1959年、イギリスでオックスフォード大学に留学した後に大使館。続いてインドネシアとアメリカ。アメリカに赴任した71年は、ニクソン大統領による突然の訪中宣言とドルの変動相場制への移行、いわゆる2度の「ニクソン

ショック」があった年です。日米の貿易不均衡問題が大きくなり始めた時で、向こうからの具体的な要求に日本側はお茶を濁すような対応。とにかく話がかみ合わなかったのを覚えています。

4カ国目はタイ。タイでは貿易不均衡を何とかしてほしい、もっと投資をしてほしいと要望されていました。5カ国目はカナダ。そして、6カ国目が中国です。公使として赴任した翌年、87年の1月に親日派だった胡耀邦総書記が失脚、良好だった日中関係に水を差すような出来事でした。7カ国目がベトナム、8カ国目がフィリピン。同じASEANでも生まじめなベトナムと、「アジアのラテン」と呼ばれるほど陽気でフレンドリーなフィリピン。好対照だと感じました。

—— ベトナムでは特に ODA（政府開発援助）再

開に向け奔走されたと。

91年に大使として赴任した頃のベトナムは、78年のカンボジア侵攻以来、国際的に孤立状態でした。国連決議で日本もベトナム向け ODA を停止していました。それが、91年10月のカンボジア和平合意を受け、再開することに。訪米してホワイトハウスや国務省にも根回しをし、翌年、円借款の供与にこぎつけることができました。ただ、日本のやり方を理解してもらわないとうまくいきません。相手の役に立つ ODA とは何かをいつも考えていました。

ギブアンドテイクではなく

—— 赴任された国々で日本企業・社員と接して残念に思った経験などありますか。

日本企業の進出は歓迎されるし、重要視される。現地への貢献度も大きいのですが……。

インドネシアにいた時に、インドネシア人の親しい友人が「日本人は日本人だけで集まって、土地の人たちと交流をしない」、「ビジネスも結構だが、こちらにも得るものがほしい」と。そのことを日本企業の人たちに伝え、「我々にそう言われても。本社に言ってくれ」と他社との競争しか眼中にない。こうした日本企業の進出ラッシュに対する反発が強まります。74年に田中角栄総理（当時）がインドネシアを訪問した際には、激しい反日暴動にまで発展しました。

日本に教えてほしい、手を貸してほしいと思っ